新潟大学季刊広報誌

新潟大学の魅力と現在を発信

花

NIIGATA UNIVERSITY MAGAZINE —RIKKA—

2013.WINTER［No.3］

授業紹介 -教育の現場-
シリーズ・対談

学生の課外活動&サークル紹介
Enjoy! 学生ライフ

同窓生が集い旧交を温めました
平成24年度 新潟大学・全学同窓会交流会

Campus Information

特集1. 地域に根ざした取り組み
新潟大学の地域貢献

特集2. 新潟大学が取り組む地域医療の実例
地域医療の担い手として

新潟大學

Special Pick up

特集1. 地域に根ざした取り組み

新潟大学の地域貢献

大学は、教育と研究はもちろん、社会への貢献も大きな使命。
「地域に根ざした大学」を目指す新潟大学の取り組みを紹介します。

地域とキャンパスではじめる ちょっと新しいまちづくり

大学の社会貢献という点では、民間企業と共同研究を行う「産学連携」がよく語られます。新潟大学にも数多くありますが、本学ではそれだけでなく、地域に直接貢献する取り組みも重視しています。具体的には、まちづくりと同時に文化活動も高めていくこと（右図）。工学部の西村先生（次頁）や農学部の高橋能彦先生、伊藤亮司先生（地域と連携した酒づくり）の取り組みは「まちづくり」であり、大学が地域住民の方と一緒に活動するケース。もうひとつは、大学が最高水準の文化や芸術を追求して皆さんに触れてもらうケースで、丹治先生（5頁）や横坂康彦先生（音楽を通した地域貢献）の取り組みはそういう「文化活動」ですね。そして、それらを「自助」――自分の足で一歩踏みだすことでいろいろなことが見える、という視点を軸に捉えたいなと。新潟大学では、清掃などのボランティアに喜んで参加する学生、エコや環境活動に取り組むサークルなど、足元に目を向け一歩踏み出している人がたくさんいます。地域の方々と彼らの絆を深める機会を作りたい…そんな思いから社会連携フォーラムを8年前の着任以来、毎年続けてきました。会議だけではお互いの距離は埋まらない。それよりもみんなでワイワイ楽しむことが絆を深めるうえでは重要なことです。

フォーラムでは合同防災訓練、学生や地域の方々の演奏・舞踊が行われる交流会を通して心がひとつになっていくように思います。今後も、そういう純な思いを持つ人達が心と心を触れ合う関係を大事にしていきたいです。

（松原教授　談）

松原幸夫 教授

産学地域連携推進機構　教授。日機装、日本電気などの民間企業を経て、2005年、新潟大学に着任。知的財産を専門にしつつ、地域貢献としてまちづくり・ボランティア活動支援も担当する。

2012年12月1日（土）五十嵐キャンパスにて開催された「平成24年度 新潟大学社会連携フォーラム『足元からの社会連携』」

避難所体験訓練

↑このイベントでは、災害時における避難所の開設・過ごし方を疑似体験できるコーナーも開設。強度もあり組み立ても簡単なダンボール製ベッドを体験したり（写真左）、地元自治会の協力を得ての炊き出し訓練としておにぎりや豚汁の試食も行われた

フォーラム

↑「新大前駅トンネル大清掃!!」など地元でボランティア活動をするさまざまな団体が活動内容を報告。参加者は熱心に聞き入っていた

地域交流会

↑この日の締めは、総踊りや黒埼太鼓、アカペラ、漫才など、アトラクション満載の大交流会!!　全員が笑顔の素敵な時間だった

CONTENTS

特集1. 地域に根ざした取り組み
03 ● 新潟大学の地域貢献
産学連携 地域とキャンパスではじめる ちょっと新しいまちづくり 松原幸夫 産学地域連携推進機構 教授
まちづくり 地域住民と学生が連携して まちづくりを推進 西村伸也 工学部 教授
文化活動 作品作りの過程やその先の 対話もアートの地域貢献 丹治嘉彦 教育学部 教授

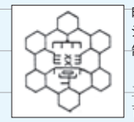
特集2. 新潟大学が取り組む地域医療の実例
06 ● 地域医療の担い手として
地域医療を担う人材を教育支援 井口清太郎 医歯学総合研究科 特任教授
ドクターヘリ本格稼働開始 遠藤 裕 医歯学総合研究科 教授
エイズ治療の拠点病院 田邊嘉也 医歯学総合病院 准教授

08 ● 授業紹介 -教育の現場-
09 ● シリーズ・対談
学生の課外活動&サークル紹介
10 ● Enjoy! 学生ライフ
同窓生が集い旧交を温めました
11 ● 平成24年度 新潟大学・全学同窓会交流会
12 ● Campus Information

『六花』とは…

本誌のタイトルでもある『六花』とは、本学の校章のモチーフである“雪の結晶”を表す言葉。本学の校章は、シンボルマークであった学生章をモチーフに本学名誉教授 小磯 稔氏がデザイン化したものです。

学生章



昭和24年に本学のシンボルマークとして制定された学生章

工学部
吉川長平さん　作

▶

校章

平成11年に本学創立50周年を記念して、幾何学的にデザイン化した学生章を校章として制定

教育人間科学部
小磯 稔 名誉教授　作

題字
野中浩俊（のなか ひろとし）氏
新潟大学名誉教授（教育人間科学部）
専門は、書道、富岡鉄斎研究
現在は、岐阜女子大学 教授

Cover Photo

昨年12月1日（土）に開催された社会連携フォーラム。避難所体験訓練では大学南が丘自治会・区役所・学生の合同炊き出しも行われた。手前は産学地域連携推進機構 松原幸夫教授。

まちづくり
民の知恵の連携

地域住民と学生が連携してまちづくりを推進

↑西村教授と共に下記「雁木プロジェクト」「三条ポケットパーク」を推進する研究室の中心スタッフたち。中国から来られた研究員もいるなど、多彩な人材がその力量を発揮している

まちづくりというものに対し、より実践的なアプローチで向かう西村教授。「まちづくりがプランづくりで終わる場合も多いのですが、それを一歩進めてみようと始めました。実際に住民と大学が協働し、自分たちの手で身近な住環境を変えていく活動です」と教授は語る。その代表的事例が下記の二つ。共に、学生が中心につくったプランを提出し、もちろん施工にも携わるなど、内容は実に本格的だ。このまちづくりチームは、研究室のスタッフ15名&学生55名から成るが「使えるお金は少なくても、住民の人たちと一緒に議論する中で、みんなが熱意をもって取り組んでいるし、なおかつ、それをやり続けてきたことで、本当の意味で地域に根ざしたものになっていると思います」と、まさに成果の多い研究活動と言えよう。

西村伸也 教授

工学部教授。都市計画・建築計画、建築史などが専門分野。学外では、栃尾の雁木（1997年～）三条市のポケットパーク（2007年～）など地域住民と連携したまちづくりに携わっている。

PROJECT.1 雁木プロジェクト

雁木を毎年一棟ずつ建設。住民との協働による「手づくりのまちづくり」

長岡市栃尾表町――こちらでは、積雪地域に欠かせない雁木通りが、住宅の建て替えや駐車場確保のために取り壊されるなどして歯抜け状態になっていた。その特徴的な雁木通りの再生を目指して、表町住民と新潟大学の学生が協働し、雁木を毎年一棟ずつ新たに建設していくという、実践的かつ手づくりのまちづくりを1997年から開始。15年前から、それも地域住民の理解と力を実際に得ながら毎年持続的に行っている点が、計画提案だけで終わらずに形にされた事例として大いに評価されるべき取り組みである。

↑現地＝栃尾を訪れ、学生自身が歩きながら実測。住民の方からのヒアリングも欠かさずに行っている

↑住民の皆さんにプレゼン案を説明する学生。スライドやパネル、模型を使って本格的に行われる

↑活動を通し、住民の皆さんとの距離も一気に身近に。こうした会合でも素敵な笑顔がこぼれる

PROJECT.2 三条ポケットパーク整備

市民と大学の協働による「ポケットパークづくり ―小さな里山づくり―」

三条市には大崎山など自然の宝庫である里山が数多くあるが、その里山の緑をJR弥彦線の高架下の空き地に移植し、地域住民に親しまれるポケットパークづくりが進行中。毎年一カ所ずつ整備し、計8つのポケットパークをつくる予定で（2012年度は6つ目を整備中）、こちらも、実際に三条市の建設業界や園芸組合の支援を受け、住民・新潟大学の学生・地域の専門家・行政が連携している点を高く評価したいプロジェクトだ。たくさんの子供たちが参加している点にも注目してほしい。

←このような図面でプレゼン。新潟大学の学生たちが、班に分かれ、それぞれ実際に現地を見ながら案を練って制作する

↑里山の緑を市街地に。街の中に居ながら地域の恵みを体感できる場として親しまれている

↑ベンチ座面に和釘を打ち込む様子。このように地域の子供が参加できる場も設けられている

↑学生が運営する催しで見られた子どもの笑顔も、地域一体型の企画であることの証明

↑町には学生たちの企画やアイデアが作品になって出現。人々の集いの場を作り出した

PROJECT.1 うちのDEアート

地域住民や行政と協力しながら学生が作り上げるアート表現

新潟市西区内野町を舞台としたアートプロジェクト。芸術の新たな可能性の模索と、地域の活性化を図ること、社会とアートの新しい関係を築くことを目的に2001年にスタート。住民や来場者、学生が参加できるワークショップ企画や体感できる作品の展示に重点を置く。美術館の額縁に飾られた絵画や台座に置かれた彫刻作品ではなく、地元住民や訪れた人々が実際にアートに触れる場を提供するとともに、アートを通じたコミュニケーションを生み出すこと、そして大学と町が連携して町の魅力を発信していくことをテーマに取り組んでいる。

PROJECT.2 いてぇもん物語

←地区住民から学校に関する写真を集め展示した『おもひで写真館』。懐かしい記憶を語り合う空間

↑図画工作などのワークショップも多数実施。子どもたちがアートに触れあう場となった

↑『盆踊REBORN!!』では、かつて板井地区で行われていた盆踊りを住民と学生が協力して復活

思い出が詰まった校舎を舞台にした参加型アートプロジェクト

新潟市西区の黒埼地区にある旧板井小学校は、昭和24年に建てられた全国でも現存が数少ない木造校舎のひとつ。『いてぇもん物語』は、解体を控えた2012年秋、たくさんの思い出が詰まった小学校を舞台に行われたイベント。かつての学び舎に込められた地域の人々の思いや謝恩の意、そこに流れるあたたかな時間といった魅力をアートを通して共有し、新たなコミュニティと繋がりを創造・発信することを目的に開催された。愛された学び舎に眠っている時間をひも解き、それを題材にして各教室を演出。学校にまつわる思い出写真の展示や教室の扉を天板に利用したカフェ、校舎の木材や金具を利用した文房具や雑貨の製作・販売などが行われ、会期中は世代を越えた多くの人たちが大切な時間と空間を共有した。

文化活動
学問・芸術・スポーツの深耕

作品作りの過程やその先の対話もアートの地域貢献

アート作品を教室の外へ持ち出し、地域社会と協力しながら広く表現。丹治教授が担当する教育学部の芸術環境講座では、『うちのDEアート』を軸にさまざまな活動を展開している。しかし、その道のりは試行錯誤の繰り返しだったと振り返る。「立ち上げ当初は外から厳しい意見をいただくこともしばしば。お互いの理解のために学生たちを地元の祭りに参加させたところ、最初は嫌々だった彼らが自主的にコミュニケーションを取り出したんです。地域連携は膝を突き合わせながら一緒に考え作っていくものだと思いました」。地域と向き合いながらゴールを目指すという構図を作るには、作品の完成が終わりではなく、その後にも対話を続けることが重要。そして点が線となり、じわりと広がっていくのだという。「作品やイベントを作る過程やその先のコミュニケーションを包括したものこそ私たちが考えるアート。それをきっかけに、様々な方向に人が介在していく流れを作れたら大成功。そのイメージを共有することで私たちが地域に貢献できるのだと思います」。

丹治嘉彦 教授

教育学部教授。絵画を中心にした美術表現のほかにも、行政や民間機関、地域社会との共同作業によってアート作品を多数制作。美術教育の可能性について研究を重ねている。

Special Pick up

特集2. 新潟大学が取り組む地域医療の実例 地域医療の担い手として

新潟大学医歯学総合病院がどのように地域医療に取り組んでいるかをレポート。大学病院というと高度先進医療が注目されがちですが、地域医療に取り組む医療人もたくさんいます。

訪問医療で患者さんからヒアリング。生の声を聞くことで、学生たちも病院に居ては体験できない貴重な時間を過ごせる

地域医療を担う人材を教育支援

井口清太郎 特任教授

医歯学総合研究科（医歯学総合病院・地域医療教育支援コアステーション）特任教授。新潟県十日町市に生まれ、新潟大学医学部を卒業。県立六日町病院勤務時に訪問医療なども経験し、実際に地域医療を行ってきた。

病院の外に出るのが地域医療 それも教えていくことが大切

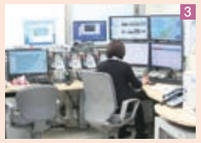
そもそも地域医療とは何か。「地域医療＝過疎地での医療とイメージされる人も多いでしょうが、英語に直すと“Community Based Medicine”――“地域社会に根ざした医療”という意味なんです。例えば今、僕らのいる新潟市のすぐそこにも地域社会があるし、実は寝たきりなど病院に通うのが困難な患者さんもいらっしゃったりするだろうと。で、そういう方を誰が診るのか、ということですよ。つまり、地域医療とは病院の外に出る医療ってことに尽きるかなと」。そう語る井口特任教授は、そんな現場に近いところでの医療を学生に指導する先生だ。「大学の授業はいわゆる高度先進医療の分野中心でしたけど、それだけでは今の時代のニーズに応えられない。むしろ今、大学に居るだけじゃ医療の本当の姿は分からない、とまで言っていいかもしれない」。そう語る井口氏自身、新潟大学医学部の卒業生であり、県立六日町病院勤務時に地域医療を行った経験を持つ人だから、言葉に説得力がある。「僕は恩師の方々から『医者と名が付く以上、ただ病気を治すだけじゃなく、その患者さんの全身を診ることが必要だ』と教わって――その広い視野で臨むことが僕にとっての医者の原点になりましたね」。インタビューの最後に出た「人間って、やりたいことをやるのが幸せではなく、求められていることに応えていくことが幸せなんだと思います」という言葉が印象的であった。

↑地域医療をテーマに、みんなで討議している様子。この中から未来の地域医療を担う人材が巣立っていく

↑2012年夏、津川～松代～湯沢を巡るワークショップに参加した学生。大学や学部学科を超えた精鋭たち

↑県内27の医療機関などと繋がれている「連携テレビシステム」。医学生の実習や講義にも使われている

ドクターヘリ本格稼働開始



1.医歯学総合病院屋上のヘリポート　2.優しい笑みを浮かべる宮澤フライトナース。「私達はいつでも、こうして着替えて出番を待っています」　3.ドクターヘリの運航管理ルーム。専門スタッフが24時間待機し、出動要請に備える　4.ドクターヘリの内部。患者は中のベッドで治療を受けながら適切な医療機関へと運ばれる

遠藤 裕 教授

医歯学総合研究科 教授。医歯学総合病院・高次救命災害治療センター部長。全国で25カ所しかない高度救命救急センターとして稼働する同センターの中心メンバーであり、実際に治療も担当する。

緊急治療への期待を背負いドクターヘリ設置

要請から短時間で医師と看護師を救急現場に投入できるドクターヘリが、新潟大学医歯学総合病院に設置された。「これで佐渡島も含む新潟県の広域をカバーします」と語る遠藤教授は、ドクターヘリの有効性を次のように語る。「統計的に言うと、通報してから救急隊が現場に着くまで約8.5分。ところが通報から患者さんが病院に着くまでとなると、新潟県の場合、40分を超えているんですよ。そういう状況で何が起きるかと言うと、救急車の中で心肺停止が起こったりする…。でもドクターヘリを使うことができれば、その移動時間が短縮されるし、ヘリの中でも救命治療を行い、状態を安定化させて病院に運びますから、救命率や社会復帰率の向上がおおいに期待されるわけです」。地域医療の拠点である新大病院に頼もしい存在が加わり、今後の活躍に大きな期待がかけられている。

エイズ治療の拠点病院

田邊嘉也 准教授

医歯学総合病院 准教授。感染管理部副部長。エイズの原因ウイルスであるHIV（ヒト免疫不全ウイルス）の研究と治療を中心に、エイズ対策事業の最前線で活躍中の医師である。

プロの医療人に、最新の情報や知識を伝える役割を担う

新潟大学医歯学総合病院は、エイズ治療における関東甲信越ブロックの拠点病院にも選定されている。その分野で活躍する田邊准教授いわく「診療施設の方に、出張研修という形でHIV診療の最新情報をお伝えしています。今、治療面がすごく進歩したにもかかわらず、いまだに怖い病気というイメージがあるし…診療施設の中には、頭ではわかっていてもなかなか実際に感染者との接触がないために患者の受け入れについて後ろ向きな方もいらっしゃいます。そういう方に対して実際に診療している医師、看護師その他の職種からの情報を直接伝えることが重要と考えています」。さらに「僕らの仕事には感染対策もあって」と言葉を続ける田邊准教授。「今年から、例えば臨港病院や新潟医療センターといった近隣の医療施設と連携し、互いの院内感染対策についてディスカッションする活動もやっています」。対・患者だけでなく、医療のプロがプロを相手に知識を伝え、互いにレベルアップを図る――。これもまた地域に密着した医療の意義ある実例と言えるだろう。

1.田邊准教授を中心に精鋭が集まり、チームとして治療に取り組んでいる
2.エイズ治療のブロック拠点病院としての活動を熱く語る田邊准教授
3.出張研修の様子。ここ数年、毎年10カ所以上の診療施設を回って最新の医療情報を伝えている

意欲ある学生が伸び伸びと勉学に勤しむ 授業紹介 ―教育の現場―

専門的な知識や技術の修得と、均整の取れた知識の獲得は教育の重要な役割。約5000科目の中から特色ある授業を紹介。

第3回 理学部

栗原敏之 准教授

専門は地質学と古生物学。国内のほか、海外でも積極的にフィールドワークを行っている。

野外実習Ⅲ

グローバルな視点を備えたフィールドワークができる学生の育成

地層や岩石を調べ、過去の地球や生物環境を明らかにする地質学。地質科学科で実施する『野外実習Ⅲ』は、独力でフィールドワークができる学生を育成する実習授業だ。受講する学生が実際にフィールドに出向き、地層や岩石を理解することで「地層の特徴とその地下への広がり」を推論。地質の調査・実習に適しているという新潟が持つ土地の優位性と、少人数制による指導は学外からも高く評価されている。まとめ役の栗原准教授によると「学生には情報の獲得の仕方を学んでもらいたい。第三者や書物だけから知識を得るのは高校生まで。大学や卒業後の社会では、自分が身をもって得た経験をまとめ、自ら発信できる人間が求められます。地球の挙動を推論することで論理的な思考力を身に付けてもらいたい」。また、そこで明らかにされる地球環境の変化や生物の進化は、人類の生産活動の発展と環境問題においても有益だという。「地質学は、エネルギー資源の獲得や地震などに対する防災の視点からも人間の営みに密接に関わっています。地質科学科では、卒業後の企業や開発分野で即戦力になる人材の教育に努めています」。

(左→右) 日野原達哉さん(自然研1年)
林 里奈さん(理学部3年)
安喰由実さん(理学部3年)
原 康祐さん(自然研1年)

STUDENTS VOICE!

「実習で得た知識とフィールドで身をもって得た経験は、卒業研究にもいかされました」(日野原)「研究におけるチーム力の大切さが養われます」(林)「計画性と実行力が身に付きました」(安喰)「学部生時代の実習で学んだ基礎は、他分野や海外での研究にも応用がききます」(原)

本田明治 准教授

専門は気象学。グローバルな視点から大気循環や異常気象、気候変動について研究している。

地球と気象

地球上の様々な大気現象のメカニズムを分かりやすく解説

地球における大気現象について図を多用しながら分かりやすく解説する授業。聴講する学生たちは、今日はなぜ雨が降るのか、風が吹くのかといった日常的な疑問から、地球温暖化などのグローバルな現象まで幅広く理解を深めている。「気象の変化はすべて物理法則に従って起きていて、数式で説明できるものです。学生には"気象学は暗記科目ではありません"と日頃から言っています。天気が変わる理由を考え、論理的に説明できる力を養ってもらいたいと思います」と語る本田准教授。また、気象学の知識は災害から身を守ることにもつながると言う。「近年、豪雪や豪雨による深刻な被害が多く発生していますが、新潟は一年を通して気象現象が多様で全国的に見ても災害の多い地域。天候変化の理由を考え、天気予報などの情報を積極的に取り入れることは、災害から身を守ることにつながることも理解してほしいと思います」。

右 木村祐輔さん(理学部4年)
左 羽賀光紀さん(理学部2年)

STUDENTS VOICE!

「今日はなぜ雨が降るのかという素朴な疑問が解決する時間。講義で身に付けた知識が実際に役立つのもおもしろいところです」(羽賀)「天候変化のメカニズム解明は専門的な内容ですが、本田先生は分かりやすく丁寧に説明してくれます」(木村)

恩師と語らう懐かしの時代

シリーズ・対談

恩師 小林昌二 名誉教授

教え子 羽田野 和人さん 岩本 潔さん

[平成2年3月 人文学部卒]

対談場所／キャフェ ウエスト

小林昌二 名誉教授

専門は古代日本史。現在は新潟市歴史博物館みなとぴあ館長。帝京大学で教鞭を執る。

羽田野 和人さん

新潟大学生活協同組合 組合員センター店長を務める。

岩本 潔さん

新潟日報社に勤務。柏崎支局長兼編集委員として取材に当たる。

対等な関係で互いに向き合う教員と学生

岩本 ここは当時、学生には少し高級な店でしたよね。

小林 昼に来ると学長がカレーを食べているんだものねぇ。

――今日はこの懐かしい空間で当時の思い出を語っていただこうと思います。

羽田野 あの頃は今以上に学生同士で行動することが多かった気がします。ゼミを越えた交流も多かったし、先生ともマンツーマンでしたよね。

小林 コンパの二次会は教師の家でやるものでしたから。そうすると女房がみんなと仲良くなるわけですよ。「羽田野君と町で会ったわよ」と(笑)。それに僕は学生と教員は対等だと思っていましたよ。

岩本 そういえば先生から「こうしなさい」なんて言われたこともありませんね。

小林 そんなこと言ったら僕が面倒くさいじゃない(笑)。教師というのは学生に背中を見せるもの。アドバイスは先輩が言うものなんです。

岩本 改めて自由な時代だったと思います。「勉強より人との付き合いが大事」という時代を過ごせたのは幸せでした。社会に出て役に立っているのは人との距離感や間合いの取り方。それは先生や友達から学んだことですよ。

羽田野 本当にそう。僕の職場は大学生協ですが、当時の大らかな新潟大学で過ごした4年間があったからこそ、キャンパスが仕事場になった。次々に入ってくる後輩たちをきちんと見守っていける仕事として選んだんだと思います。

小林 彼らが自由だと感じていたのはよかったですね。このふたりより1、2年上の連中なんか、人文学部歴史系の『裏ガイ』というガイドブックを作っていましたよ。そこには教師のキャラクターや単位を得るコツが書いてあって、後輩たちはそこで教師に対する見方や接し方を学ぶわけです。おまけに実にユーモアとあたたかみが溢れる教員批評も書かれているんですね。これはレベルが高いなぁと感心しましたよ。

羽田野 先生には京都の学会に連れていってもらったり貴重な経験をさせていただいたけど、卒論は苦労したよね。

岩本 僕は卒論を書くことで、勉強の仕方を学んだと思っています。新聞記者をしていて、卒論とは書いている内容は違うけれど、何かに疑問を持ったり、突き詰めたりする粘りは、卒論で苦しんだことに原点がある気がしますよ。

小林 自分を掘り下げるっていうのかな。「どうして自分がそこに興味を持っているのか」を突き詰めていくところに自分があり個性があるので。その興味を社会との関係を考えながら自分なりの文章で書くのが論文。文系にとってはそれこそが学力ですよ。

羽田野 先生は当時おいくつだったんですか?

小林 40代の半ばくらい。今の二人くらいでしょう。

羽田野 僕らが今、先生みたいに若者に影響を与えられるのかなって考えてしまうな。

岩本 とても思えない(苦笑)。

小林 僕の影響じゃないよ。あなたたちが勝手に育ったんだから、責任をとれと言われても困る(笑)。

羽田野 先生から感じたあたたかみのあるキャンパスを新潟大学の魅力のひとつとして作っていけるように頑張ろうと改めて思いましたね。

岩本 僕も先生に教えられ、道標を示していただいた者として恥ずかしくない仕事をしていきたいと思います。新潟県の新聞記者として、地元で暮らす人たちの役に立つ記事を書き、発信するよう頑張ります。

小林 こういう人生の話ができるのが友達ですよ。彼らや僕らの時代はこういう友情というモチーフで人生が描けそうなんです。立派になった二人に僕から言えるのは、友達として末永く仲良くやってくれということに尽きますね。

Enjoy! 学生ライフ

学生にとっては、部活に代表される課外活動も
大切な青春の1ページですよね！　このコーナーでは、
そんな部活動を中心とした新大生の活躍をお届けします!!

CIRCLE PICK UP!

45年の伝統を受け継ぐ 落語研究部

↑12月8日（土）に行われた「名人会」の様子。1年の活動の集大成

↓第11回ときめいと寄席後の一コマ

芸を高める以外にも
学外での様々な交流は
とても勉強になります

伝統の話芸で笑いの空間を作る

「各人が磨き上げた表現や噺で、お客様に笑ってもらうのはクセになるし、何よりの喜び。自主公演以外にも老人ホームや福祉施設からの依頼を受けて落語や漫才、イベント司会を行っています」（渡部）　「落語を通じた学外での交流は世代を越えたもの。キャンパスの中ではできない貴重な体験も多く、社会勉強になります」（樋浦）

左→右）
前部長　樋浦重一さん（経済学部3年）
現部長　渡部智和記さん（法学部2年）

滑りの演技力を競う 基礎スキー部

左→右）
堤　菜乃さん（工学部2年）
現部長　中村真規さん（理学部2年）
前部長　保坂遼平さん（工学部4年）

いかに上手く
格好よく滑るかに
挑戦しています

↓昨年度の大会授賞式の一コマ

理想の演技を求めトップシーズンに突入!!

「基礎スキーはタイムではなく、滑りの美しさを競い勝敗が決まるもの。斜面の状況は常に変わり、追い求めるものに限界がないところに難しさがあります」（保坂）　「大会では他大学との交流も多いので楽しいです」（堤）　「目標は全国学生岩岳スキー大会。特に団体戦は学生時代にしか できない競技なので、いい成績が収められるようにがんばります」（中村）

↑タイムではなく、演技力や表現力で得点を競うところに面白さと難しさがある

CAMPUS TOPICS!

環境系サークル「ひまわり」が正門周辺プランターの花を植替え

←↑今年のマリーゴールドの時期は終わりましたが、来年芽が出てくることを学生や教職員も期待しています

学生が愛着を持って育てる花 来年の咲き誇る姿に一同期待

11月3日（土）、正門周辺に設置してあるプランターの花の植替えを行いました。このプランターは環境系サークル「ひまわり」の学生が、1年を通じて花のお世話をしています。植替えは今回で5回目となり、正門が新たに整備されてから約2年半の間、学生達は愛着を持って継続的に行っています。今回は今までプランターで育てていた花（マリーゴールド）の移植も新たに試みました。

農業サークル「まめっこ」の取り組みが「西区もったいない大賞」を受賞

←授賞式の様子。写真左からまめっこメンバーの2人と協力者の方々

大学構内にある無農薬で育った椿の木から一番搾りのみを精製し天然椿油を製作

「もったいないコンテスト」は、新潟市西区内で「もったいない」という気持ちを大切に身近で取り組む事例等を募集する企画。「まめっこ」は、キャンパス内にある椿の木から、天然の椿油を作っており、今回の受賞は、この取り組みが総合的に評価されたものです。11月3日（土）に開催された「ふれ!ふれ!西区ふれあいまつり」の中で同賞の表彰式があり、泉西区長から表彰状と副賞が授与されました。

平成24年度 新潟大学・全学同窓会交流会

2012.10.27@ANAクラウンホテルプラザ新潟

下條学長

進藤農学部同窓会長

多和田全学同窓会長

武藤元学長

荒川元学長

同窓生が集い旧交を温めました

平成24年10月27日、恒例の新潟大学と全学同窓会との交流会がANAクラウンプラザホテル新潟で開催されました。この交流会は、新潟大学の同窓生が一堂に集い、旧交を温め、また新潟大学教職員との親睦を図ることを目的に行われており、当日は約180名が参加しました。今回は、創立60周年を控えた農学部同窓会が担当しました。まずは、記念講演会が行われ、研究報告として、自然科学系（農学部）テニュア・トラック助教　中井博之氏による「高機能性食品素材として有用な新規糖質の生産開発」と題した発表が行われました。続いて、佐渡市でトキの野生復帰に取組み、本学の超域朱鷺プロジェクトとも関係の深い、環境省佐渡自然保護官事務所首席自然保護官長田 啓氏から「トキの野生復帰が目指す人と自然の共生」と題して記念講演が行われました。講演会終了後には、懇親会が行われ、多和田全学同窓会長の挨拶、生田理事の乾杯で開会。雪華支援事業の表彰式や学生サークルの活動報告などが行われ大いに盛り上がりました。また、今回は合唱部による新潟大学学生歌が披露され、会場中に響き渡る大合唱となり、賑やかなうちに閉会となりました。この交流会は、今秋にも開催予定ですので、同窓生の皆様のご参加をお待ちしております。

講演会場の様子

雪華支援事業の表彰式

長田氏の講演

合唱部による学生歌斉唱

同窓生の皆様へ！ 新潟大学季刊誌『六花』無料ご送付します。

新潟大学が取り組むさまざまな活動や教育研究、学生の活躍などが満載の『六花』を同窓生の皆様に無料でお届けします。ご希望の方は本誌創刊号付属のハガキに必要事項をご記入の上、お申し込みいただくか、裏表紙記載の広報センターまでお問い合わせください。

Campus Information

地域に密着しながらさまざまな活動を続ける新潟大学。
皆さんにお伝えしたいニュースはたくさんあります!

春のオープンに向け中央図書館の改修工事が着々と進行中!

↑増改築工事が進む中央図書館

→ゆったりと設置された書架

昨年、10月から既存棟2階の改修を行っています。既に工事が終了した3階フロアにはブルー系のカーペットが敷かれ色鮮やかです。学習用図書の書架は、改修前より間隔が広くなり、ゆったりと図書を見られるようになっています。さらに、集中して勉強をしたい人のために新しく個室もできました。これから増築棟を始めとする各エリアの整備を進めていきますので、4月のリニューアルオープンをどうぞご期待ください。

大学施設のイベント情報

新潟大学 旭町学術資料展示館

新潟市中央区旭町通2-746　tel.025-227-2260
水曜～日曜の10:00～16:30

企画展

『永吉 秀司 日本画展 ―現代日本画の表現と技法―』

2013年2月14日(木)～3月24日(日)

内容:日本美術院院友 新潟大学教育学部永吉秀司准教授の作品を展示します。「淨草回帰」というコンセプトで制作された作品展示のほか、普段あまり見ることができない現代日本画の技法について紹介します。

新潟大学 駅南キャンパス ときめいと

新潟市中央区笹口1 プラーカ1・2階　tel.025-248-8141
月～金曜 8:30～21:30／土・日曜 9:00～21:00(入館は閉館30分前まで)

イベント開催報告

『七色の恐竜展 ～どのように鳥へと進化したか～』

2012年12月9日(日)～12月26日(水)

内容:恐竜が鳥へ進化した過程を、パネルや標本の展示により明らかにする企画展を開催しました。参加した子どもたちは、顕微鏡での観察や工作を通して楽しく生物の進化を学びました。期間中には、スタンプラリーやワークショップも行われました。

新潟大学基金のお知らせ ぜひご協力ください

「新潟大学基金」は、皆様からのご寄附を基に、学生の修学支援や、国際交流活動等、魅力ある大学作りのために活用しています。ご寄附をいただいた場合、税法上の優遇措置が受けられる他、特典もご用意しております。詳しくは基金ホームページをご覧ください。

●基金ホームページ http://www.niigata-u.ac.jp/kikin/index.html

新潟大学基金事務局
電話:025-262-5651(受付時間 平日9:00～17:00)
FAX:025-262-7272　E-mail:kikinjimu@adm.niigata-u.ac.jp

新潟大学 季刊広報誌 六花 RIKKA 2013.Winter No.3
■発 行／平成25年1月
■編 集／新潟大学広報センター
(新潟市西区五十嵐2の町8050番地)
■電 話／025-262-7500　■FAX／025-262-6539
Home Page http://www.niigata-u.ac.jp/
E-mail rikka@adm.niigata-u.ac.jp

編集後記

「地域貢献」を特集テーマに取り上げ、新潟大学での取り組みのほんの一部をご紹介させていただきました。社会連携フォーラムでは各種イベントを通して、地域住民と学生、教職員の強い繋がりを改めて実感することができました。『六花』を通して、少しでも多くの方にこのような取り組みを広めることができれば幸いです。(Y.K)

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。